リアルブレイン

森林 深介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
リアルブレイン

【Ｎコード】
Ｎ０５７０Ｚ

【作者名】
森林　深介

【あらすじ】
時は２０３０年。それは、日本にとってＳＦ映画のような世界でなく、科学の進歩よりも景気と治安の悪化が進んだ世界だった。主人公、有磨は一年前の事件をきっかけに世界を否定する力「リアルブレイン」という能力に目覚める。リアルブレインに携わる多くの出会いを経て、有磨はリアルブレインの意味、目の前にある現実の真の姿を追及する。様々な思惑が交差する異能力人間ドラマ。

起

さんさんと日差しの照りつける教室の一角

君には何が見える？

誰も聞いていない話を延々と続ける先生？

こちらを見てバカみたいに笑う友人？

それとも、好きな異性の後ろ姿？

どれも俺には見えない。

２０３０年。それは、日本にとってＳＦ映画のような世界でなく、科学の進歩よりも景気と治安の悪化が進んだ世界だった。

その中では、無駄に白い校舎と名前の割に黒くない黒板だけが遠い昔から時が止まったままのように思える。

？．

「有磨くん！！」

机の上から重い頭を上げると目の前にはきれいな紫色の少し入った髪をなびかせ、大きな蒼い瞳をつり上げている少女――――黒木ホノカ（という物質の集合体？）が立っていた。彼女とは家が隣の幼馴

染で、よく昔から三人で・・・・。
「有磨くん起きて～」
ホノカの甲高い声が頭に響く。
「起きてるよ・・・」
有磨も低くにごった声で応戦する。
「有磨くん寝過ぎ。うちに先生から連絡がきたよ。有磨くんが学校で誰ともしゃべらないって」
ホノカの紫の前髪が軽やかに揺れる。
別のクラスなこともあって、この一年間、学校での有磨とホノカの会話は珍しかった。
「有磨くん人を避けるキャラじゃなかったよね？　なんか理由があるの？　先生から話をきいたとき、お母さんは頭がどうかしたんじゃないかって」
明るい微笑みのなかに心配を隠した表情でホノカは有磨を見つめる。
ちなみに有磨に両親がいない今、ホノカの母親が有磨の保護者代わりをしてくれている。
そして、ホノカ自身、有磨の身におきたことの詳細はわからなくとも、きっかけとなった出来事くらいは、おそらくうすうすは感付いているのだろう。
「いや、何もねえよ」
人を避ける理由――…か。
「んじゃ、帰るわ」
頭は――――…確実にどうかしてるな。
有磨は軽く思考を頭に促し、軽く返事をホノカに返しながら、帰り道に足を向けることにした。
中学の頃は、有磨はサッカー部で、ホノカはバスケ部。そして現在は、有磨は帰宅部、ホノカはバスケ部を継続。昔はよく、夏は夕焼け、冬は暗闇の中を三人で帰っていた。
三人で…ね。
有磨はぼーっとした頭に喝をいれ、歩みを速める。

部活に向かうクラスメイト（という物質の集合体？）を横目に見ること、先生（という物質の集合体？）に対する会釈を繰り返しながら、有磨は学校をあとにした。
（という物質の集合体？）というのは、有磨の視点によるもので、有磨の意識に関係がある。
彼の眼には物しか写らないのだ。
正確に言えば、普通の人と眼に写るものは変わらない。しかし、人、生物の認識が外れ、細胞、分子のレベルでしか世の中を見ることができない。つまり、彼の眼にとっては人も物も変わらず、物質でしかないのだ。
有磨はこのことを正確に理解していたわけでないが、なんとなくは感覚でわかっていた。だから「特に変わらない平凡な日々」の風景も有磨には感じることができないのだ。
そしてさらに加えると、有磨にはもう一つ見えるものがある。
それこそが彼に人を避けさせる理由を与えている・・・。
頭を空にして足を運んでいると、街角の大画面のニュースが有磨の眼に写る。
「デプレストエリア東京９地区で発砲事件、８名が死亡、３名が重傷…」
・・・またか。
２０３０年の日本では格差が街を構成している。簡単に分類すると生活に余裕のある者が住むのがブライトシティ、余裕のない者が住んでいるのがデプレストエリアである。
貧困化する国の治安維持のための手段と結果である。
ブライトシティでは、病院、学校、ショッピングモール、住宅などが監視カメラや警備員の配置された道によって結ばれている。
一方、デプレストエリアでは、ホームレスの徘徊はもちろん殺人、強盗などが日常茶飯事で行われている。
治安大国日本の名声も完全に地に堕ちていた。だから、デプレストエリアでの事件など、普通の人はもちろん有磨にとっても全く気に

も留めないものなのだ。
そして現在、有磨は亡くなった両親の恩恵と昔からの隣人であるホノカの両親の気にかけによってブライトシティに留まっている。
本来、セキュリティ維持のため高額課税が強要されるブライトシティでは、担税力がないと判断された者は白い壁の向こうに追い出される。
白い壁とはブライトシティとデプレストエリアの境界となっているものである。
通路から建物までブライトシティのすべてが囲い込まれている。
行き来には厳正な認証確認が必要で、デプレストエリアから不法侵入しようというものなら、政府直属の警備専門武装軍隊セキュリティマネジメントポリス、略してＳＭポリスが即座に登場することになる。
そして、時にはその白い壁が赤く染まることもあった。
ちなみにＳＭポリスという略称名には後ろめたいギャグ要素は含まれていないらしい。
歩を進めていた有磨の足の動きが止まった。
目の前には「ブライトシティ東京病院」という建物が人々を圧倒するかのように堂々とたたずんでいる。
来るものを拒むかのような塀、口を大きく開けた門、純白で新築を思わせる巨大な建物。
有磨の見つめる先は3階の右から2番目の窓、３０２号室・・・。
有磨は毎日ここに来て、毎日同じ場所を見つめているが、それ以上中に踏み出すことはなかった。今日も同じように病院を背に歩きだす。
「ちょっと待ちなさーい！！」
後ろから女の子の声。
有磨は自分のことではないと認識しながらも視線を声の方向に向ける。
するとそこには、茶色の髪と、それに見合った日本には珍しい茶色

の瞳をもつ女の子の姿があった。そして、その子から逃げるような行動を見せる黒髪の男。
「本気で逃げ切れると思ってんの！？」
女の子は力強い声と力強い走りで男との距離を縮めていく。男の焦りもあらわになり、その距離があと少しというところで男の目の前に赤い車が止まった。
男は女の子に向かって笑みの表情を浮かべ、その車に乗り込んだ。
そして、次に瞬きをする頃には車はすでに有磨の横を通り過ぎようとしていた。
有磨はその車を視線で追いかける。すると、また後ろから声がする。
「あぶない！！」
有磨が振り返ると、そこには女の子が投げたらしき黒いバットがすごい回転とすごいスピードで有磨に襲いかかろうとしていた。有磨は頭を下げ間一髪でそれを避ける。バットはそのまま宙を舞い、電信柱に当たって嫌な音を響かせた。
「大丈夫？」
視線を上げるとバットを投げた主がそこには立っていた。
今は何も感じないが、一般的に可愛らしい外見の持ち主であるように有磨には思えた。
スカートがひらひらと有磨を威嚇するように風で揺れている。
「ああ」
有磨はあきれ顔でゆっくりと返答した。
「本当は車に当てるつもりだったんだけど…。あの男、患者のおばあさん達を騙してお金奪っていったのよ。まさか仲間がいるなんて…。」
そう言いながら女の子はバットを拾い上げた。
その様子を横目にしながら有磨も手を地面に着いて立ち上がる。
「あ、怪我！！」
有磨は女の子の視線の先を追いかける…。確かに膝のあたりに赤い液体が少しだが皮膚から染みでている。

とっさにバットを避ける際、地面ですりむいたのかもしれない。
「私は植草チサト。ここの外科医の妹なの。医療道具を自由に使って大丈夫だから一緒に行きましょ」
チサトと名乗る女の子は有磨に手を差し伸べる。
「いや、大丈・・・っ」
有磨がチサトに目を向けると、チサトの向こうに猛烈なスピードでこちらに向かってくる赤い車が見えた。
――――そう、あの男が乗り込んだ赤い車が、チサト（と、有磨？）をひく気でやってきていたのだ。
「やだ！このブライトシティで殺人まで犯す気！？」
有磨につられて振り返ったチサトが叫ぶ。
病院前のあまり人気のないこの通り、実は左右は塀のみ。病院入口までは数メートルの距離があった。逃げ場所はない。
救急車いらずの病院最寄りこの場所で、事件が起きようとしていた。
車はもう目の前に迫っている。
やばい、もう逃げ切れない。
そう有磨が思った時、車に緑色の閃光がきめ細かくラインを描くように突如現れた。
これこそが有磨に人を避けさせる原因である、もう一つの有磨にしか見ることができないもの。
有磨はそれに向かって手を差し伸べる…。

その時、チサトはひかれるのを覚悟して眼をつぶっていた。
しかし、いくら待っていてもいっこうに何かにぶつかる気配はない。
チサトはおそるおそる瞳を開いてみる。
すると、瞳に入ってくるものは、手を前に差し出す有磨の姿と、自分の左右で真っ二つに引き裂かれ横になっている車の残骸であった。
中の男二人は気絶しているようだ。
「ちょっと、これ・・・」

チサトが我に返り有磨に声をかけようしたときには、有磨はすでにかなり離れたところを歩いていた。
チサトは追いたい衝動に駆られながらも、車で気絶する男二人をこのまま放置することもできずにその場にとどまった。
「あいつ、もしかして・・・」

有磨は黙々と歩き続けた。
視線をひたすら地面に這いずらせる。
やってしまった・・・。
有磨は気づいていた。光を放つ緑色の閃光、それが何なのかはともかく、それに触れることでどんなことを引き起こすかを。
だから、あの事件のとき以来、人を極力避けてきた。
人を傷つけたくないから・・・。
沈みかけの太陽が有磨の影を伸ばす。
有磨は、ただそれを見つめて歩いた。
ブライトシティの無味乾燥に立ち並ぶビルが、そんな有磨をあざ笑うかのように見下していた。

有磨はその日、夢を見た。あの事件の日の夢を。
一年前、中学3年の3月。卒業式を終え、自分が中学生なのか高校生なのか不明な時期。快晴の休日だった。
その日、有磨は暇を持て余し、自宅でゲームをしていた。そして、一緒にテレビ上で死闘を繰り広げているのは、いつも通り幼馴染で親友の南山翼であった。
「はい、また俺の勝ち～。」
翼は満面の笑みと少し掲げたガッツポーズでこちらを見る。
「またって今日はまだ2回目だろ！！」
有磨の応戦。
「毎日、俺のが勝ち越ししてるじゃん」

「ま、毎日じゃねえよ！！」
確かに、ゲームにおいては翼の方がうまいのだが・・・
「お兄ちゃん、弱いの～？」
幼い声が割り込む。
「お前よりかは強い！」
有磨は、後ろに立つ今年小学3年生になる…なるはずだった妹、優香を振り返りもせず一蹴する。
有磨の家族はこの優香と両親。起床をすれば挨拶もするし、円卓を囲んで食事もする一般的に仲の良い家族だった。
「お兄ちゃん、意地悪～。」
と、言いながらも優香も暇なのだろう、有磨の隣に座り、そこに留まる。
いつもと変わらない心温まるような時間。
しかし、何の前触れもなく夕暮れにそれは起きた。
「こっ来ないで！！」
母の叫び声が家中に響いた。有磨、翼、優香の3人は部屋のドアから玄関の方向を覗き込む。するとそこには玄関から土足で迫りくる見知らぬ男の姿があった。手には刃物。
「ぐふふふ」
眼がいっている。完全に麻薬か何かでラリっている様子だ。おそらくデプレストエリアから舞い込んだのだろう。
しかし、セキュリティシステムが作動した様子はない。
「いっいや・・・」
母は完全に混乱していた。それもそのはず。警備に特化したブライトシティ内では現在、目の前にいるような不審者はもちろん、浮浪者さえ見ることはないはずなのだから。
母は腰を抜かした様子で地べたを手で這いながら男との距離を取ろうとしていた。
だが次の瞬間―――母の背中に男の刃物が深く突き刺さる。隣で優香が泣き叫ぶ。

倒れた母の体の周辺に、赤い血が円を描くように広がっていった。
有磨は突然の出来事に何が起きているのか理解できず、頭も体もフリーズさせていた。
体が動かない。
「うあああ」
奥の部屋でその様子を見た父が、普段の優しい顔からは想像できない怒りの顔で逆上していた。手入れでもしていたのか、手にはゴルフクラブが握られている。
そして、有磨も見たことのない早くも力強い動きで男に襲いかかったのだった。
バキッと鈍い音が響く。
ゴルフクラブは男にクリティカルヒット、男は壁際まで吹っ飛び倒れる。父は息を切らしながらも男を見下し、次の一撃を喰らわせんとする。
「パパ～」
その様子を見ていた優香が泣きじゃくりながら父に抱きつきに行った。
「ママが～ママが～」
父は優香を温かく抱擁する。
「ママはまだ間に合うかもしれない。でも、ここは危ないから優香はお兄ちゃんと一緒に部屋で・・・。」
ドスッという音と同時に父が黙った。顔はみるみる蒼白になる。
「ぐふふふ」
男はすでに立ち上がり、その手に持つ刃物は、母と同じように父の背中に深々と突き刺さっていた。
「くそ・・・」
父の体が重力に逆らえず倒れる。優香はすでに声をからした喉で泣き叫ぶ。そして、男の視線は確実に優香に向き、次のターゲットを物語っていた。
優香が危ない、その危機感が有磨のフリーズを解いた。

しかし、その有磨より一足早く動いたのは、同じくフリーズ状態であった翼であった。
刃物を持つ男相手に勇敢にも捨て身の勢いでタックルを喰らわせんとする。
だが、先ほどの学習であろうか、男は狂って冴えない顔からは想像できないような動きでそれを避け、刃物を振りかざす。翼はそれを避けんとしてのけ反り――倒れた。
どうやら振りかざされた刃物は肩にかすめた程度、浅い傷を負っただけで済んだようだ。しかし、危機的状況であることに変わりはない。
その時、翼の眼が有磨と合った。何かを訴えている。有磨はすぐに理解した。「男の注意は完全に自分に向いている。今のうちに優香を助けろ」翼の眼がそう告げている。
確かに男は今、優香に背を向けている。今なら・・・。
有磨は翼に向かって頷き、優香に向かって走る。しかし、次の瞬間・・・

ブシュッ

優香の泣き声が止んだ。
男は――翼より泣き叫ぶ優香を刺すこと、そのことのみを始めから頭に置いていたのだった。
優香から流れ出る赤い液体、優香の虚ろな瞳。
有磨の目の前が真っ白になった。

こんなの認めない――――
こんな世の中――――――俺は、認めない――――――。

真っ白だった視界が晴れると、そこにはかつての世界はなく、いろいろな形を形作る物質の蠢く世界だった。有磨の世界が変わった瞬

間だった。
有磨は何もかも壊したかった。そして、壊すことにした。
眼に写る物質、すべてのところどころに緑の閃光が走る。
有磨はそれに触れたかった。そして、触れることにした。
ぐぎゃー、と男の第一声が上がったように感じた。
だが、有磨には関係なかった。
男の悲鳴は第二声、第三声と続く。
だが、有磨にはどれもこれも関係のないことだった。
男の悲鳴は沈黙へと変わる。
「有磨！！　大丈夫か？　どうした？」
誰かの声と共に誰かの腕が有磨の肩に置かれた。有磨は何も考えず
その腕にも触れる。
そして、誰かの悲鳴が上がった。
有磨の脳内に、その悲鳴が閃光のように駆け巡った。
この声は・・・翼。
有磨の意識は突然はっきりした。
目の前に広がる光景――――血みどろで這いつくばっている男の死体、
右手を失い、腕を押さえながらもがく翼。
そして、有磨は気を失った――――

ガタッ
ベッドの感触。目蓋越しにも伝わる陽の光。人の気配。
時は現代に舞い戻っていた。
「あれ？　有磨くん、起しちゃった？」
有磨は重い目蓋を上げる。すると、やはりこちらを覗き込むホノカ
の瞳がそこにはあった。
また、こいつか…。いつもそうだ。
あの事件の直後も病院のベッドの横にいてくれたのはホノカだった。
悪夢から眼を覚ますと必ずいてくれる。
有磨は周りを見渡す。すると気のせいか少し片付いているように感

じる。
「掃除なんてしなくていいのに」
有磨がつぶやく。
「有磨くんのおうちがごみ屋敷になっていくのを黙って見てらんないよ。はい、お弁当」
有磨はホノカのサラリとした口調によって放たれた屈辱にうなだれながらも、お弁当は素直に受け取った。
背に腹は変えられない。今となっては、有磨の体中の物質に化学変化をもたらすエネルギーのほぼ１００パーセントをお隣さんからの食糧支給に頼っている。
「学校に遅れちゃうよ。早く準備しよ」
「あぁ、わかったよ」
有磨はホノカに急かされながらも、制服に着替え、弁当を鞄にしまって準備を終えた。授業は基本的に寝ているだけだから持ち物はない。
そして、その様子を見て少しあきれ顔のホノカと共に外の世界に踏み出した。
「有磨くん、音声ロック忘れてるよ」
「あぁ、…ロック！！」
「音声確認、複製可能性なし」
機械的な音声と嫌な機械音を響かせ、ドアがロックされた。
ドア付近で不審音がするだけで警戒態勢がひかれ、１０分もそのままならいよいよＳＭポリスがやってくる。ブライトシティ全体のセキュリティを中央政府がしっかりと握り、治安を保っているのだ。
セキュリティ技術だけが変に進歩したものだ。
有磨は自分の家に背を向けて歩きだす。
そして無関心な一日が――また、始まりを告げた。
？．

学校ではとりあえず寝る。瞳を閉じていれば緑の閃光が現れる心配もない。だから、他人とも必要以上に関わることをしない。関心を持たない。そうすれば傷つけることもない。
授業中、有磨は今朝見た夢、あの事件を思い出していた。
あの事件により、母親、父親、優香・・・そして犯人の４名が死亡。翼は右手を失い、そのショックで記憶も失った。１年経った今も回復することなく、ブライトシティ東京病院３０２号室の住人と化している。
そして、デプレストエリアからの不審者の侵入を許した原因も未だに不明らしい。
キーンコーンカーンコーン――――
諸行有常の学校の終わりを告げるチャイム。
「起きなさいよ！！」
女の子の声。
誰かはわからない。だが、こういうとき瞳を開いて眼に入ってくるのはいつもホノカの蒼い瞳だった。有磨はそんな確信めいた気持ちでその重い目蓋を開く。すると眼に入ってくるのは・・・茶色の瞳に茶色の髪――――
「誰だっけ？」
「植草チサトよ！！　昨日のこと覚えてないの！！」
「あっ、あぁ…」
「何？　その気のない反応。まぁいいわ、一緒に来なさい」
チサトはつい昨日バットを振り回していた二の腕で有磨の腕を掴み、力強く引っ張る。
「いてててッ、つーか何でここにいんの？」
引っ張られる腕の痛みに耐えながら有磨は問う。
「はぁ、この制服が見えないの？　私もここの生徒よ。昨日のあんたの制服見て、もしやと思って探したのよ」
「何で？」
有磨の問いにチサトは困った表情を浮かべ、周りを見渡してつぶや

く。
「・・・あとで話すわ」
そして、有磨は自分の意思と関係なくズルズルと引きずられるのであった。
―――ガンッ！
激しくドアの開く音。
「有磨くんを無理やりどこに連れていくんですか？」
普段のやさしい顔を怒りで統一させたホノカがキビキビとこちらにやってくる。
「有磨くんから手を離してください」
スッと、チサトはとりあえず有磨を開放する。
「あんた何？」
空いた手を腰に据え、チサトの鋭利な視線がホノカを刺す。
「有磨くんの…おっ幼馴染です。」
なぜか戸惑いを見せるホノカの返答に、チサトは「ふーん」と、小馬鹿にしたような笑みを浮かべる。実際のところ、なぜ自分がこんなむきになった行動をしたのか、チサト自身にもわからなかった。
すると、今度はホノカがキッと目つきを変え、問い返す。
「あなたは有磨くんとどのようなお知り合いですか？」
「えっ…あたし！？」
チサトは若干の焦りを見せつつしばらく視線を宙にさまよわせた後、視線を下に逸らしたまま小さく呟く。
「んー…ヒミツ…」
しかし、意外にもこの言葉はホノカに大きなダメージを与えた。
ホノカの顔がみるみる赤く膨張する。そして、有磨のいた方向に向き直り――
「有磨くんこれは・・・えっ」
同じ方向を向いたチサトも思わずため息を漏らす。
しばらく流れる沈黙――――有磨はすでに帰宅済みのようだった。

有磨はいつも通りの通りをいつもの通りの時間に歩いていた。
そして、いつも通り眼に入ってくる街角の大画面のニュース。
「少数宗教団体の教祖として名を馳せていた川崎新造氏が死体で発見されました。この事件は殺人とみられ、ブライトシティ内部における少数派宗教教祖等の部類の殺人被害者はこれで６件目です。この連続殺人事件は同一人物によるものとみられ…」
眼から勝手に入ってくる映像に有磨は少し悪寒を覚える。普段は目もくれないのに。
確かに、いつもと少し違う。ブライトシティ内部だし、少数宗教団体？
だが、理由はわからない。
気のせいだ、自分には関係のないことだ。そう自分を納得させ、有磨は歩みを速めた。
そして、いつも通りにたどり着くこの場所。「ブライトシティ東京病院」
なぜ毎日この場所に来るのか。
なぜ毎日同じ場所を見つめるのか。
そのくせ、なぜ毎日これ以上踏み込まないのか。
有磨にはわかっていた。翼から右手と記憶を奪い去ったのは紛れもなく自分である。だが、その事実と向き合えない、向き合いたくない自分がいる。翼への罪の気持ち、償いを求める気持ち、そして、自分の犯した事実を認めたくない気持ち。そのすべてが混在して現在の行動の繰り返しを生み出している。
そして、有磨はいつも通り病院に背を向け、いつも通りその場を後にしようとする。
―――が、今日はいつもと違った。振り返ると、男がその先には立っていた。黒髪に黒縁眼鏡、そしてどこかで見覚えのある茶色の瞳。白衣を着ているところをみると、どうも医者らしい。
男は口を開いた。

「君が切崎有磨くんだね」
なぜ自分の名を知っているのか、有磨は顔をしかめる。
そしてなお、男は続ける。
「一年前の事件で唯一、無傷で生き残った少年・・・・あぁ怖い顔しなくていいよ。僕は君の味方だから」
何の意図があるのかまったくわからない。有磨はすべてを無視し、男の横を通り過ぎる。そして2，3メートル離れたとこで男がまた口を開いた。
「君も自身の特殊体質について知りたいだろう？」
有磨は思わず振り返る。だが、男の顔を直視したのち、無理やり心を落ち着かせる。
「何のことですか？」
平静を装う有磨の必死の返答。
「わかりやすく言えば、君の眼のこと。正確に言えば、君の脳のことだ」
有磨は思わず目を見開き、男の言うことに耳を傾けることにした。

男の指示に従ってついていき、気づくと白い壁に覆われた個室に案内された。診療室のようにも見える。
「とりあえず自己紹介から始めよう」
向かい側に座る白衣の男が口を開いた。
「見てわかると思うけど、僕はこの病院で医者をやっている。担当は外科。トオルって呼んでくれればいいよ」
そう言うとトオルは白い歯を笑顔で見せつけた。
「医者なんて格好はホワイトカラーだけど、仕事はむしろブラックカラーなんだよね。いや、むしろレッドカラーかな？」
不気味なほど爽やかな笑顔が有磨の瞳にこびりつく。
「あの・・・」
ここに来たのは間違いだったのではないかと感じながらも、有磨は口を開く。

「ごめんごめん、君が知りたいのは、君の特殊体質のことだね。え――んじゃまず、君の見る世界が変わったのは一年前の君の自宅で起きた事件のとき。間違いないね？」
トオルの瞳の輝きが有磨の眼をとらえ、有磨は視線をそらすこともできなくなった。
「・・・はい」
「まず始めに言っておくと、今の君が他人と違うのは、『眼』ではなく『脳』だ。僕らは『リアルブレイン』と呼んでいる。ま、そのまんまなんだけどね。あえて簡単に説明するなら絶望の力、世の中を否定する力だ。人は何かしらの認識を基に物事を見る。たとえば、この筆箱・・・」
トオルは脇に置いてあった黒い筆箱を有磨の目の前まで持ってくる。
「人はこの形状や色から判断して、筆箱、もしくはただの黒い箱と捉える。この認識のフィルターを通すプロセスを失うと、この物体は黒の色素を含んだ鉄原子、鉄分子の集まりでしかなくなるんだ。」
有磨はわかるようなわからないような面持ちで思考を巡らせる。しかし、確かに自分の現在の状態に似通っているような気もする。
「原因は正確にはわかっていない。ただ、何かしらのきっかけによって絶望し、世の中に対する脳内のすべての認識を否定することでリアルブレインは目覚める、と僕らは考えている。もちろん、めったにあることじゃないけどね」
一言でまとめると・・・
トオルはなお続ける。
「リアルブレインとは『否定によって世界という認識のフィルターを通さずに物事を見ること』によって起こる現象だ」
トオルが一息おいたところで、黙っていた有磨がある疑問を問いかける。
「あの・・・さっきから言われている『僕ら』っていうのは・・・」
――ガラガラ
重たげな音を響かせ部屋の横にあったドアが開く。

有磨が視線を向けると・・・茶色い瞳と眼が合った。
「――ッって、何であんたがここに居んのよ！」
茶色の瞳の保持者、植草チサトがそこには立っていた。有磨は、もう一人の茶色の瞳の保持者に向き直る。
「え――トオルさん。苗字を教えてもらってもいいですか？」
トオルは通常通りにこやかな笑顔で答える。
「植草だけど・・・どうかした？」
有磨の頭の中で、トオルとチサトが兄弟というシナプスでつながれた。

チサトが制服からの着替えのため、その場を後にしたのち、ちょっとした沈黙が流れる。
「さっきの続き――僕らはリアルブレインを継承する一族なんだ。」
トオルはさびしげな表情で肩を落としながら、沈黙を遮る。
そのさびしげな表情に疑問を持ちつつ有磨は言葉を漏らす。
「そんな一族が・・・」
「どのくらい前からかは分かんないけど、知識の保持と能力の保持、それを代々継承しているんだ。ちなみに、日本だけでも数家系、詳しくは知らないけど外国にもあるらしいよ」
ハキハキとした口調でトオルは説明を続ける。
「たいていの家系は、世間に表だって出ずに集団で生活していたり、国の特別機関に配備されていることが多い。あと身近な例でいうと、9割は一般人のトリックだけど、世間でいう超能力者や宗教関係で名を売っている者も多い。やっぱ持っている能力が特殊だからね」
そして・・・と言ってトオルは有磨に向かってぐっと身を乗り出す。
「あの事件の犯人の死体、君の友人の腕を見る限り、僕の推測では・・・君の特異能力は、物質と物質を切り離す力だね」
そう言って、口を一文字にして黙っていた有磨にトオルはウィンクを飛ばす。

「えっと…リアルブレイン?を持つ人間は皆同じ能力なんじゃ・・・?」
そのウィンクに有磨は冷静な疑問文で返した。
「それが違うんだ。君の場合は物質と物質の切り離しやすい狭間を敏感に感じてしまうんだね。それでおそらく触れるだけで狭間の部分がずれて、切り裂くことに繋がるんだ。僕の場合は、物質と物質の間を見通すことができる。ま、論より証拠だね」
少し陽気さを見せながらトオルは視線をドアの方向に向ける。
沈黙――――
ガチャ
ドアノブが捻られる。
そして、あまりさっきと変っていないがおそらく部屋着スタイルなのだろう、紫パーカーに制服スカートのチサトがこの空間に足を踏み入れた。髪はひとくくりにまとめられている。いわゆるポニーテールというやつだ。
そのチサトにトオルは爽やかな笑顔で語りかける。
「そういえば今日はチサトには珍しく柄物だな。水色の縞模様か」
そして、トオルはなぜか笑顔をそのまま有磨に向ける。有磨はなんのことかわからないままその笑顔を受け止める。
すると、その笑顔はバットに打たれたボールのごとく何かに打たれ、有磨の視界から消えた。その何かとは言うまでもなくチサトの蹴りなのだが・・・。
チサトはそのままキッと有磨を睨む。その顔は激しく動いたためだろうか、真っ赤に染まっていた。
「あんた想像したらぶっ殺すわよ!」
チサトは興奮気味で有磨を指さし、有磨にとって不可解な忠告をする。
「何のことだか・・・」
口を開いた瞬間、有磨はなぜかチサトの拳を間近で見ることになった。肌で、いや、顔で感じることになった。わかりやすく言うと顔

面を殴られた。
そして、気を失い地面に這いつくばる間際、有磨の瞳が有磨の脳にトオルの発言の意味を語りかける。
チサトの下半身でひらひらと舞う布――――その中身――――――
あ――――そういうことか――――。
有磨はしばしそのまま、気持ちよく眠ることになった。

有磨はまた夢を見た。
自分のものでない記憶、自分のものでない真実の夢を・・・。

太陽がまぶしい。
右手にはドライバー、左手にはボルト、ドアの修理。
これが俺の仕事――――いや、『ドア』の修理がじゃない、依頼されればたいていのものは何でも直す『何でも修理屋』というとこだ。
頭に巻いていた白いタオルが灰色に染まり、つなぎを腰に巻きつけているために上半身で唯一身につけているタンクトップも汗で肌に一体化した頃、ドアは本来あるべき姿にもどっていた。
安堵のため息をつきながら、彼は汗が噴き出す額を拭う。すると、彼の肩に誰かの手がそっと置かれる。振り返ると、そこには優しい微笑みで彼を見上げる老人が立っていた。
「コウくん、お疲れ様。事務所に戻ろうか」
コウは力強くも汚れなき笑顔で返答する。
「はい、大沢さん」
大沢才蔵、彼は5年前ブライトシティを追い出され路頭に迷ったコウ達を拾ってくれた恩人である。コウの現在の雇い主でもある。
コウもかつてはブライトシティの住人であった。両親を亡くし、貯金も尽きた頃、このデプレストエリアに放り込まれた。それからずっと大沢のもとで世話になり続けている。
「しかし、君たちに出会ってもう5年か・・・」

事務所兼大沢の自宅の扉を開くと同時に、大沢は口を開いた。
「すると、コウくんも２０歳になるのか。・・・。弟さんも無事、中学卒業間近。君の昔からの夢も叶いそうだね。弟さんをブライトシティに返してやることだったよね」
そう言って大沢はまたもや優しい笑顔でコウに安らぎをもたらす。
「はい、高校も決まり、寮も確保できたのであとは見送るだけですね」
コウも肩を落とし、安堵のため息をつきながら微笑みを返す。
この事務所は大沢の自宅も兼務しており、大沢の年齢と同様にあちらこちらにかなりの年数が感じられる。しかし、そんな壁のひびや染みもコウにとっては心地の良いものであった。
「あと、これは今日の依頼者の差し入れ。こっちでは珍しい太っ腹な人だったね。弟さんにもっていってあげるといい。」
そう言って、大沢はお菓子の詰め合わせのようなものをコウに差し出した。
「ありがとうございます。弟も喜びます。」
大沢の手からコウの手へ詰め合わせの箱が渡る。すると気のせいか、大沢の手が震えているのにコウは気がついた。よくよく見ると顔色も悪いように思える。
「大沢さん、顔色が悪いですよ。お疲れなんじゃないですか？」
ビクッと大沢の肩が震える。
「あ、あ…少し疲れているかもしれないな…。すまない」
大沢は椅子に腰を落とし、また呟く。
「すまない…」
大沢の視線はコウではなく地面を見つめていた。そんな大沢に違和感を覚えながらもコウは大沢の後ろに立ち、肩を揉みほぐす。
「何をそんなにあやまっているんですか。大沢さんには元気でいてもらわないと困ります。今日は早めにお休みになってください」
すると、大沢はやっと視線を地面から切り離しコウに向ける。
「すまない。コウくんも早く戻りなさい。弟さんが待っているだろ

う」
大沢はいつもの笑顔に戻り、コウを送り出す。
「はい。ありがとうございます。それでは、また明日」
「ああ、また明日」
また明日、そんな言葉をお互いに残し二人は本日の別れを終えた。

夕焼けがデプレストエリアを照らす。一般的に見ればきれいな景色に見えるだろう。しかし、コウはそれを感じることができなかった。コウにとってはデプレストエリアの景色はどれもこれも灰色にしか見えなかった。
黒と白の混沌とする世界。そんな世界でコウの人生を色づけているもの、それは弟への想いのみであった。
「おい、早く乗り込め」
黒スーツの男らが数名の人をトラックに蹴り込む姿がコウの眼にとまった。
この黒スーツの奴らは、いわゆるヤクザとかマフィアの部類で、まとめてデプレスターと呼ばれている。
デプレストエリアが政府の介入なく、かろうじて社会性を保っていられるのはこのデプレスターの統治によるもので、彼らのビジネスのために必要最低限の社会性が維持されている。
つまりは、このデプレストエリアでは住人はすべて彼らのカモであり、彼らがここのルールと化している。
そして、トラックに詰め込まれている人々は彼らのカモになり、麻薬で餌付けされ、搾取されるだけ搾取され、不要になった人々である。
あのトラックで、ブライトシティとの境界である白い壁の近くに運ばれ、捨てられる。麻薬で正気を失った彼らは誤ってブライトシティに侵入しようしＳＭポリスにより処理される。それでめでたくデプレスターは手を汚さず廃棄物を処理できる。
コウは拳を痛いほど強く握り占める。

しかし、その痛みでも、自分はどうすることもできないという現実により絞めつけられるコウの心の痛みを相殺することは全くできなかった。
コウは歩みを速める。
しかし、こんなことがなくともこの場所は痛みであふれている。路地裏で放置されている死体、動けなくなり壁際に腰掛けることしかできなくなった老人、そして、親を亡くして放浪する子供たち。昔の自分らのように・・・・・。
「ください」
両手を掲げ物乞いをする少女がコウの脇目にとまる。このようなものから目をそらせば少しは痛みから逃れることができるかもしれない。しかし、コウにはできなかった。
「ごめんな」
お金はあげられない。弟のユウのために必要だから。
そして、コウは先ほど大沢から受け取った詰め合わせを差し出した。
「ありがとう」
少女は目を輝かせながらそれを受け取り、友達らしき子たちのもとへ駆けていった。
こんな状態であっても人と分かち合うことを忘れない無垢さにコウは驚く。こんな子たちを守れる強い男になりたい、コウはその時そう思った。

数の少ない光の灯る窓。その中の一つに古臭いアパートの二階部屋の窓があった。コウの住む部屋だ。
ユウは何をしているだろう。
そんなことを考えているうちにコウは階段を上がり部屋にたどり着いていた。
「兄さん、おかえり」
ちゃぶ台を前に据え、腰を地べたに下ろしているユウがコウに視線を送る。

「また勉強していたのか。とりあえず受験は終わったんだ。そんなに勉強しなくてもいいんだぞ」
「そんなことはできないよ。兄さんが僕のことをブライトシティに送ると決めた日から、僕も兄さんをブライトシティに連れ戻すって決めたんだ。そのためにも政府に入ってこの国を変える。こんな世界間違ってる・・・ってかっこつけすぎたかな？」
ユウはらんらんと輝かせた瞳を恥ずかしさでうつむかせる。
「そうだな。まぁ、ブライトシティで女くらいつくらないとかっこつかねーな」
ユウの言葉を誇りに思いながらもコウはからかいの言葉をユウにぶつける。
「ここに来てずっと働きづめだった兄さんを差し置いてそんなこと・・・」
一瞬の間ができる。コウは気のせい程度にユウの視線が自分の股間あたりに視線がいっているのを感じた。いや、感じてしまった。
「ユウ、お前もしかして俺のこと童貞だと思ってんな？」
「えっ」
「やっぱりな。安心しろ。俺も１５歳まではブライトシティにいたんだ。こんな肉体派のスポーツ万能を女の子が放っておくはずないだろ」
「・・・・・」
「まぁ、ユウみたいな内気なガリ勉君はブライトシティに行ってもモテないだろうけどな」
コウの挑発の言葉にユウはたれ目の優しい瞳をつり上げる。
「っっつ、わかったよ！　彼女ができたらいち早く兄さんに知らせてやる。うらやましがらないでよ」
「あぁ、楽しみにしとくよ」
そんなどうでもいい会話をつづけながら日常生活の必須行事（食事等）を終え、コウ達は床に伏せた。
しかし、本日コウにはショックな出来事がひとつあった。ユウに童

貞だと思われていたこと。そして、それが事実であること。
肉体派のスポーツ万能、モテていたこと、それはあながち間違いではなかったが、コウはそれ以上にカタ物であった。
俺、魔法使いになってしまうかも・・・・
「魔法使い」そんなコウの予感はある意味で最悪の形で現実になる。

いつも通りの朝を迎える。昨日も夜遅くまで勉強していたのだろう、隣ではユウが死んだように睡眠に従事している。そんなユウを横目にコウは事務所に向かうことにした。
青いはずの灰色の空、白くも清潔感のない壁、慣れることのない混沌な空気、何もかもがいつも通りであった。
そして、事務所に着き、かわり映えのしない一日がまた始まるかのように思えた――
「ん、ドアが開かない」
いつもなら大沢さんが開けておいてくれるはず。
だが、コウが何度ノックしても中からは物音ひとつしなかった。
病気にでもかかって寝入ってしまっているのか。
そんなことをコウは頭の片隅に置きつつも数十分その場で待機したのち、事務所を後にした。
その後、コウは毎日、事務所を訪れた。
不審に思わなかったと言えば嘘になる。
しかし、それ以外にコウができることはなかった。
そして、ユウのブライトシティへの出立を1週間前に控えた日の午後、そいつらはやって来た。
コウとユウのいつも通りの談笑を遮り、部屋全体を揺さぶるようなノック音が鳴り響く。
この来客にコウは身構え、ユウは完全に怯えていたが、それ以降のドアの向こうは沈黙を守っていた。
不気味な沈黙であった。
コウは警戒を解かずにユウを背に回し、そのドアを開く。

そのドアが地獄に繋がる扉になっていたことも知らずに。
ドアを開くと、そこには死神のような不吉な笑みを浮かべるスーツの男が立っていた。コウは即座にこの来訪者が何者であるかを悟った。デプレストエリアでスーツを着用している組織、それはデプレスター以外あり得なかったからだ。
コウがこの来訪の理由に関して動揺と思考を廻らしている中、死神は口を開いた。
「私はデプレストエリア東京１４地区を任せられている瀬川というものです。大沢才蔵さんの件でお訪ねさせていただきました。ちなみに本日はお話だけですので暴力はやめてくださいね。うちの連れも凶暴なんでね」
そう言って瀬川は、わざとコウに悟らすようにアパート前を陣取る黒い車とそれを囲うように立つ３人の大男に視線を向けた。
太陽の下に出ているわけでも、運動しているわけでもないのに、コウの体からは汗が噴き出していた。
とても嫌な汗だった。
大沢の名がでたことに疑問を抱きつつ、冷静を装いコウは返答する。
「大沢さんがどうかなさいましたか？」
瀬川の笑みに不吉さが増す。
「単刀直入にいいますと、大沢事務所が我々に借金をしていた。そして、大沢才蔵は身元をくらました。すると、大沢事務所に残るのは片山コウさん、つまりあなたというわけです」
コウは愕然とした。
大沢が突然いなくなった理由、最後の日に大沢が多用した「すまない」という言葉の意味、そのすべてが電気信号のように体中に駆け巡り、コウの全身の力を奪った。
棒のように頼りなくなった足を踏ん張らせ、コウは瀬川に問う。
「金額は・・・」
まるでコウの反応を楽しんでいるかのように瀬川は沈黙を置き、その質問に答える。

「２０００万円です。あなた方がもともとブライトシティに住んでいたこともわかっています。親戚や知人の伝手でどうにかなるでしょう。期限は一週間後です」
瀬川はそれだけ述べ、一歩下がって丁寧に礼をする。
そして、あの死神のような笑みで「では、また来ます」という宣言を残し、コウの前から姿を消した。
その直後、全身の力が抜けコウは地面に膝を落とす。
親戚・知人・・・いないわけではない。しかし、誰もかれもコウ達が両親を失い、財産を失い、困り果てたときそっぽを向いた連中だ。とてもじゃないが助けてもらえるとは思えない。あの大沢ですら逃げ出したのだ。人の思いやりなど当てにならない。だからと言って、デプレストエリア内で準備のできる金額でもない。
コウはうずくまってひたすらに考えを巡らした。
「にいさん」
ユウの声。その声に反応し、コウが顔を上げると心配そうに見つめるユウの顔があった。自分が守るべきもの、それを再認識しコウは決意する。
あと少しなんだ。立ち止っている場合じゃない。
コウは立ち上がり身支度を整える。
「ユウ、俺はしばらく家を空ける。ユウは何も心配するな」
声なく頷く弟を残し、コウは家をでた。
希望を、人の思いやりを信じぬく決意をして・・・。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0570z/

リアルブレイン

2011年12月2日01時47分発行